

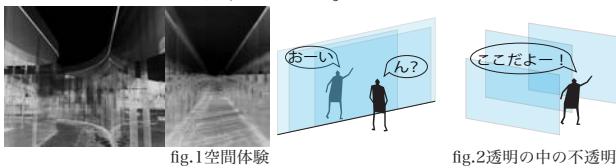
透明の中の見えない場 虚の不透明性を用いた建築

指導教員 吉松秀樹教授 印

8AEB2106 金子 嵩宜

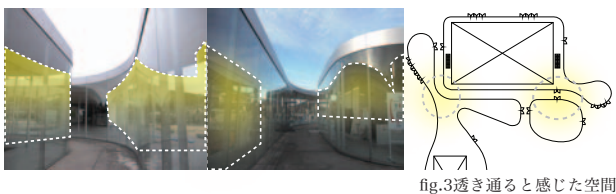
1.- 透き通る体験 -

「鬼石多目的ホール / 妹島和世」での透明の中に不透明な部分があるような空間体験に魅力を感じた。どこまでも見える全体と、身体的感覚に差があり透き通るように感じるのはなぜだろうか (fig.1,2)。



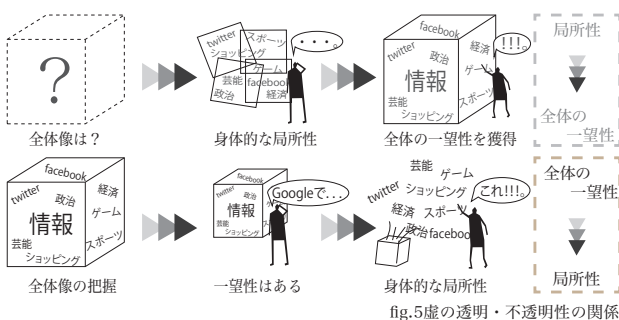
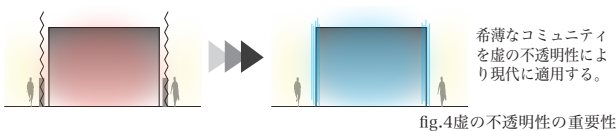
2.- 透き通る -

「透き通る」と感じる空間とは何かを調査・分析した。透き通る空間とは、全てが透明な空間では感じることができないものである。ガラスの重なりにより視覚効果を出したり、曲面ガラスにより像を歪ませることで透明な中に不透明な部分があり「透き通る」と感じる (fig.3)。



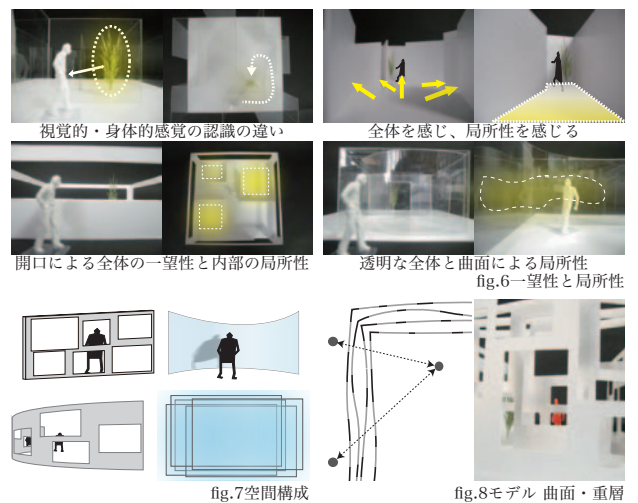
3.- 透明性 -

「透き通る」空間の調査から、透明性に着目した。コーリン・ロウの「虚の透明性」の部分での知覚を得て、全体を知覚するという概念の図式を反転させた「虚の不透明性」という概念が重要であるとする。現代を生きる私たちは、全体の一望性と、身体性の局所性の知覚を二重に感じ、空間の知覚が変化しているため、「虚の不透明性」という概念が必要であると言える (fig.4,5)。



4.- 透明な不透明性 曲面と重層 -

虚の不透明性から全体の一望性と身体性の局所性についてモデル化・分析する (fig.6)。不透明な壁に開口をあけることで壁は透明な存在になり、幾重にも重ねることで視覚的に不透明感を得る (fig.7)。全体は視覚的一望性を感じ、部分では壁の重層により見えない場ができる (fig.8)。



5.- 透明の中の見えない場 -

曲面や重層させることで透明の中に見えない場が現れる (fig.9)。パブリックな空間にプライベートな空間が内包され、それぞれの空間は入り交じりしみ出るように感じる。全体としては透明に感じるが、部分での知覚は不透明に感じる場があり多様な空間体験ができる (fig.10)。

